

■学校経営のポイント

「特別の教科 道徳」(道徳科)の評価の基本

小島 宏

学習評価は、児童生徒にとっては自己の成長を振り返る契機となるものであり、教師にとっては自己の指導方法や指導計画の効果を確認し改善・工夫する手掛かりとなるものである。今回は、道徳科の評価の基本と実際について考えることにする。

各教科の学習評価の基本

学習評価について、新学習指導要領の総則には「児童(生徒)のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」「創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、学年や学校段階を越えて児童(生徒)の学習の成果が円滑に接続されるように工夫すること」とある。これは、道徳科においても同様である。

道徳科の評価の基本

道徳科の評価は、「児童(生徒)の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする」となっている。

これは、道徳科で養う道徳性は、多様な児童生徒の人格全体に関わるものであり、数値などによって安易に評価することが適切でないことを特記したものである。

道徳科の評価のポイント

道徳科の評価は、「多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身の

関わりの中で深めているか」を重視し、次の諸点に留意して評価することがポイントとなる。

- ①育むべき資質・能力を観点別に評価するのではなく、児童生徒の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、見通しと振り返りの場面を設定しつつ見取る。
- ②他の児童生徒と比較して優劣を決めるような評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め認め、励ます個人内評価として行う。
- ③そのため、数値などによる段階評価(54321、ABC、◎○△など)ではなく、記述式で評価を行う。
- ④個々の内容項目ごとでなく、大きくりなまとまりを踏まえて評価する。
- ⑤発達障害等のある児童生徒についての配慮すべき点等を学校や教員間で共有する。
- ⑥新しい指導要録が公表されるまでは、暫定的に、道徳科の評価に関する文科省通知(平成28年7月)で示された参考様式を参照する。

道徳科の評価の実際

児童生徒の成長の様子を捉えるためには、「評価資料」が不可欠である。例えば、観察や会話、作文やノートなどの記述、質問紙等、面接、逸話や実例などの方法で、ポートフォリオのように累積・収集することが実際的である。

通知表での評価

通知表は作成するかしないかを含めて、様式や内容が各学校の判断によることになっている。また、通知表に道徳科の評価を記載することにした場合には、個人内評価とし文章で記述する。

その際、上記①～⑥に配慮し、「具体的に、どのように記述するか」を十分に検討し、教員間で共通理解して進める必要がある。

(こじま・ひろし=元東京都立小学校長・(公財)豊島修練会理事長)

●「特別の教科 道徳」の「評価」への負担感・不安感にお応えします！ 《大好評発売中》

「道徳科」評価の考え方・進め方

【編集】永田繁雄 A5判・164頁／定価(本体1,800円)＋税

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>をご利用ください。

